

〈編集後記〉

高橋さん、私たち家族は父と生き別れたまま、^{ころとう}葫蘆島から連絡船で日本に帰還したのですよ、と内田弘さんは私に語った。それは2001年の早春、専修大学社会科学研究所の北京大学・大連視察旅行の帰路、大連港でのことであった。私は今もなお、その言葉の重さを受け止めることができないままである。内田さんの思索の歩みは、2歳から7歳（1941～1946年）までの幼少期における中国東北部での経験に思いを致すことなくして理解し得ないと私には思われる。

生活の場に真理は根付いている。真理は現場にある。これが内田さんの認識の原点である。単純明快である。内田さんの思想体系は重厚かつ壮大であるが、同時にきわめて具体的である。過酷極まりない修羅場を通して社会を見たがゆえに、その「世界」認識は存在をも賭けた全体認識という手法にならざるをえない。後に故郷を離れ、国際貿易都市、横浜の学舎で長洲一二さんに出会い、双方感応し、市民社会の進展に将来を託すことになるのである。生活実践・意識・歴史理論の重層的構造連関という非線形的な論証でしかこの世界は説明ができない。したがって、徹底した論理的リゴリズムにありながら、その表現方法は文学的である。

その意味で『三木清』論は内田さんの集大成といえるかも知れない。アジアの中に市民社会の世界性を展望し、労働者・勤労者の眼で社会を分析（下向法）し、学知者の眼で各論理階梯を総合（上向法）する。しかも、後者は現実の学知者ではない。将来社会、否、現に存在する潜勢力としての労働者・勤労者の学知の眼が時代を結審する。内田さんの「市民社会三段階論」の含蓄は理論的には市民的資本主義の段階を超える要素が内在されているところにある。

今年中に望月清司さんと内田弘さんの主著が清華大学の哲学グループによって翻訳、出版される予定である。日本の市民社会論を媒介にして、日本と中国およびヨーロッパとアジアの市民的な知的連帯が育まれることに二方の思いも一入のものがあろう。

内田さんはブリストル、ナポリ、北京とグローバルな知的ネットワークで結ばれた21世紀型のネット晴耕雨読モデルに生きられるようである。市民農園で栽培されるあの驚き呆れる美味しい西瓜を今夏もまた見事に収穫されますように。ご健勝で。 （高橋 誠）

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

（発行者） 内 田 弘

製 作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
